久留米市文化財調査報告書　第 434 集

ヘボノ木遺跡

－ 第７４次発掘調査報告 －

Hebonoki Site

－ A Report of 74th Excavation －

令和４（2022）年３月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。市内には先人達の残した文化遺産が数多く残り、その究明が進められております。

今回の調査は、東合川三丁目で実施しました。遺跡の南東部の調査で、縄文時代や弥生時代、古代、中世の遺構を確認し、過去の調査で見つかった遺構や、遺物の広がりを把握することができました。これらの成果が地域史の研究や、久留米の歴史や文化財保護に対する市民の理解に貢献できれば幸いです。

なお今回の発掘調査に際して、土地所有者の辻俊夫様をはじめ近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和４年３月31日

久留米市教育委員会

教育長　井上　　謙介

例　言

１．本書は、令和３年度に辻俊夫氏の委託を受けて共同住宅建設に先立ち実施した、ヘボノ木遺跡第74次調査の発掘調査報告書である。

２．本調査の略記号はＨＢＮ－074、調査番号は202107である。

３．調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。

４．遺構配置図・個別遺構図のいずれも、座標は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基に作成し、方位は座標北を示す。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正は行っていない。

５．遺構配置図は、西と発掘作業員の舟越朝菜、山口誠也がトータルステーションで作成し、株式会社CUBIC製の「遺構くんcubic」で編集・保存した。

６．遺物出土状況は西が水糸メッシュ法（1/10）で作成し、発掘作業員の進上裕永と宮原眞助が補助した。

７．遺物実測図は、土器と陶磁器を西と出土品整理作業員の古賀和子、古賀啓子が作成し、石製品を職員の小川原励が作成した。拓本は出土品整理作業員の古賀啓子と田中千佐子が作成した。

８．遺構・遺物実測図の浄書は、西と文化財整理員の今村理恵、出土品整理作業員の山元博子、湯川琴美が米国アドビ製の「Adobe Illustrator」で行った。

９．土層と遺物の色調は、『新版　標準土色帖』（日本研事業株式会社、昭和42年）に準拠した。

10．写真撮影はデジタルカメラで行い、遺構写真はCanon EOS６Ｄで、遺物写真はリコーPENTAX K-１Ⅱで西が撮影した。上空からの写真撮影は、有限会社空中写真企画に委託した。写真は掲載にあたり、米国アドビ製の「Adobe Photoshop」で編集した。

11．遺構の略記号は、ＳＩ－竪穴住居、ＳＫ－土坑、ＳＰ－ピット、ＳＸ－その他の遺構を示す。

12．出土遺物や図面、写真などの記録は、久留米市埋蔵文化財センターで収蔵・保管している。

13．本書の執筆と編集は西が行った。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに…… 1
Ⅱ．位置と環境…… 2
Ⅲ．調査の記録…… 4
　１．基本層序…… 4
　２．検出遺構…… 4
　３．出土遺物…… 11
Ⅳ．総括…… 22

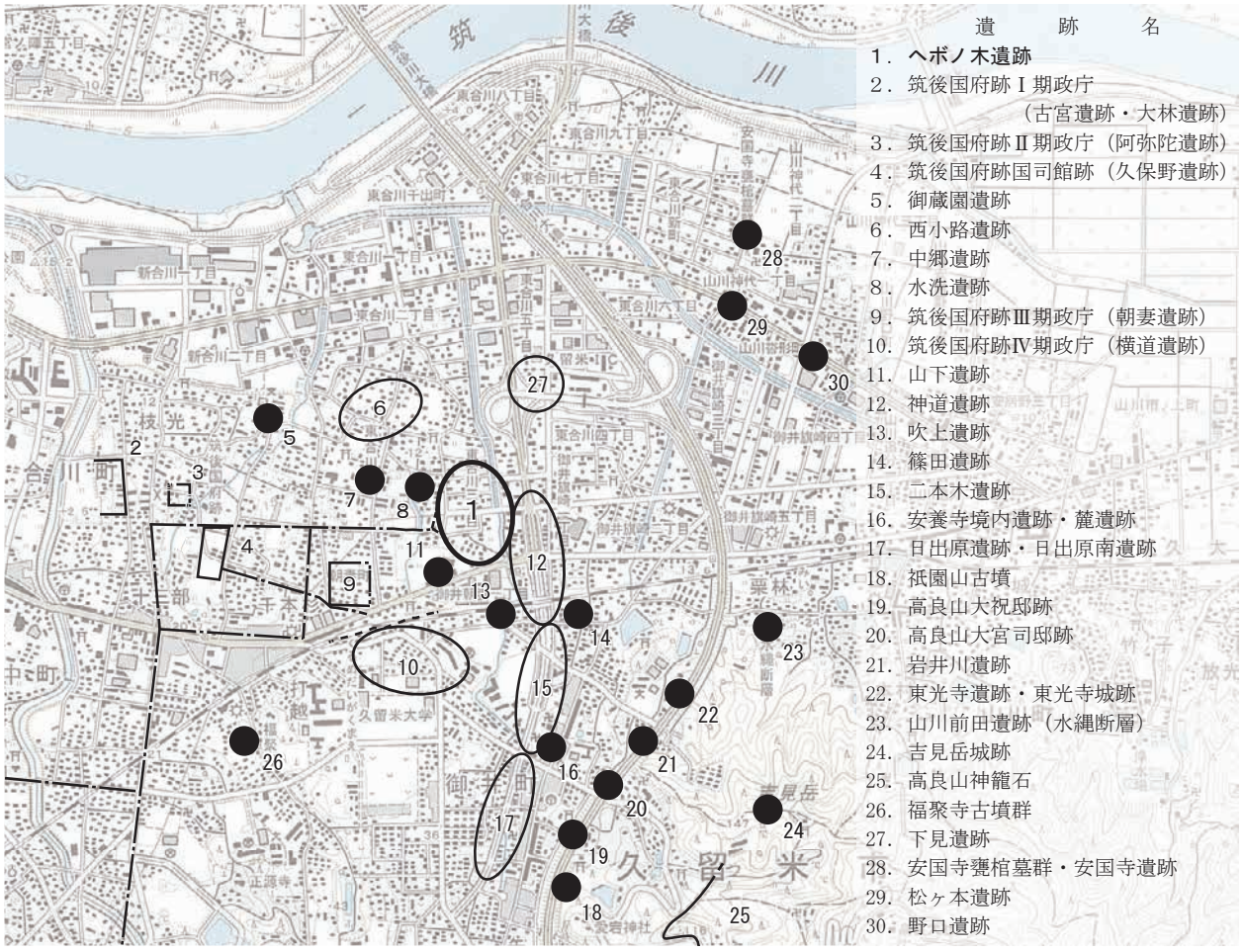
図　版　目　次

表紙図版　調査地点上空から望んだ高良山（北西上空から）…… 表紙
第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 目次
第２図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）…… 3
第３図　ヘボノ木遺跡第74次調査遺構配置図（1/150）…… 4
第４図　調査区全景（南上空から）…… 5
第５図　ＳＩ270完掘状況（北西から）…… 5
第６図　ＳＩ270土器出土状況（西から）…… 5
第７図　ＳＩ270実測図（1/40）…… 6
第８図　ＳＰ160土器出土状況（南から）…… 6
第９図　ＳＸ２検出状況（南西から）…… 6
第10図　ＳＸ３検出状況（北から）…… 6
第11図　ＳＰ160、ＳＸ２・３実測図（1/20）…… 7
第12図　ＳＫ161石英出土状況（南東から）…… 7
第13図　ＳＫ161・250・300実測図（1/40）…… 8
第14図　ＳＫ250遺物出土状況（北東から）…… 8
第15図　ＳＫ300完掘状況（南から）…… 8
第16図　ＳＰ275・305、ＳＸ１実測図（1/20）…… 9
第17図　ＳＰ275土器出土状況（西から）…… 9
第18図　ＳＰ305土器出土状況（北西から）…… 9
第19図　ＳＸ１上甕出土状況（南東から）…… 10
第20図　ＳＸ１下甕出土状況（南東から）…… 10
第21図　ＳＫ230・240完掘状況（北東上空から）…… 10
第22図　ＳＫ320完掘状況（東から）…… 10
第23図　ＳＫ230・240・320実測図（1/40）…… 11

第24図　出土遺物実測図１（1/4、1/2）…… 12
第25図　出土遺物実測図２（1/4、1/2）…… 13
第26図　出土遺物実測図３（1/4、1/2）…… 14
第27図　出土遺物写真１…… 17
第28図　出土遺物写真２…… 18
第29図　出土遺物写真３…… 19
第30図　出土遺物写真４…… 20
第31図　出土遺物写真５…… 21
第32図　ヘボノ木遺跡南東部・神道遺跡主要遺構図（1/1,000）…… 23

表　目　次

第１表　出土遺物観察表１…… 15
第２表　出土遺物観察表２…… 16



第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅰ．はじめに

１．発掘調査に至る経緯

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。令和２年（2020）７月30日、土地所有者の辻俊夫氏から、久留米市東合川三丁目257番１における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の埋蔵文化財包蔵地であるヘボノ木遺跡の範囲内であり、10月16日の確認調査でも、地表下1.1ｍで遺構面を確認した。建築計画では対象地に盛土が施されるが、建物の杭が遺構面に及ぶため、発掘調査が必要である旨を回答した。

令和３年（2021）３月25日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、土地所有者と久留米市長は４月13日付で「ヘボノ木遺跡第74次調査発掘調査委託契約書」を締結した。現地での発掘調査は４月19日から５月29日まで実施し、整理作業と報告書作成は令和４年（2022）３月31日まで西町文化財整理事務所で実施した。対象面積は1,591㎡、調査面積は住宅部分の258㎡である。

２．発掘調査の体制

調査委託：辻　　俊夫

調査主体：久留米市教育委員会　　教 育 長：井上　謙介

調査総括：久留米市　市民文化部　　部　　長：竹村　政高

次　　長：深堀　尚子

文化財保護課　　課　　長：水島　秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼課主査：白木　　守、丸林　禎彦

主　　査：水原　道範

事務主査：小澤　太郎、江島　伸彦

庶務担当：市村久美子、箔谷　　綾

事前確認担当：熊代　昌之

発掘調査・報告書作成担当：西　　拓巳

発掘作業員　青木佐智子、池尻　忠行、石橋　康子、大倉隆太郎、鐘ヶ江　清、川野　洋之
久保田英嗣、進上　裕永、原　　学、舟越　朝菜、本荘　郁子、宮原　眞助
村田　雅巳、本村美奈子、山口　誠也

３．調査の目的と経過

今回の調査は、ヘボノ木遺跡の南東部の様相、特に隣接する第47次調査地点で検出された、縄文時代や弥生時代、古代の遺構の分布を把握するために実施した。令和３年４月19日に調査器材を搬入し、21日から重機で調査区の表土剥ぎを開始した。地表下約1.1～1.5ｍで遺構面に到達し、23日まで表土剥ぎと排土整理を行った。この間、４月22日から発掘作業員を投入して遺構検出を行った。各遺構の掘削や撮影、測量などの記録作業は４月28日から始め、５月26日にドローンを用いて調査区全景を撮影した。空撮後、５月28日から重機で調査区の埋め戻しを開始し、５月29日に埋め戻しと器材の撤収を完了して、現地での発掘調査を終了した。

Ⅱ．位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部に位置し、筑後川の中・下流域に面する。久留米市の南東部に聳える耳納山地の西端には、高良山や明星山、飛岳といった標高200～300mの山地が位置する。表紙図版のとおり、高良山からは北西に向かって丘陵が派生しており、標高を減じながら段丘崖を経て、筑後川左岸の氾濫原に至る。ヘボノ木遺跡はこの丘陵の北部、南を段丘崖に、東西を中谷川と井田川に挟まれた、標高約13～14mの低位段丘の上に位置する。

ヘボノ木遺跡における人類の足跡は旧石器時代まで遡り、ナイフ形石器が表採されている。縄文時代には、横道遺跡で草創期まで遡る土器が出土したほか、大林遺跡やヘボノ木遺跡、山下遺跡、水洗遺跡、篠田遺跡、吹上遺跡、安国寺遺跡、松ヶ本遺跡、野口遺跡で土器や石製品が出土した。また、横道遺跡では早期の土坑や集石遺構、朝妻遺跡と神道遺跡で埋甕、西小路遺跡で竪穴住居と土坑群、篠田遺跡と野口遺跡で土坑が確認され、高良山の麓から筑後川にかけて集落があったことを示唆する。西小路遺跡で出土した石棒や石冠は、精神文化や東日本との交流を考える上で注目できる。

弥生時代には、第47次調査で夜臼式土器の埋設遺構が検出されたほか、ヘボノ木遺跡の南部で中期後半の竪穴住居が分布する。火災痕跡を有する竪穴住居もあり、丹塗土器が出土する祭祀土坑を伴うのが特徴である。中期後半の集落遺跡は、大林遺跡や久保野遺跡、朝妻遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡でも見つかっており、中谷川の対岸には安国寺甕棺墓群があることから、さらなる集落の存在が示唆される。後期後半には、古宮遺跡と大林遺跡でＶ字溝を伴う竪穴住居群と甕棺墓が検出され、鏡片や鉄鏃が出土した。同時期にはヘボノ木遺跡でも竪穴住居が見られ、楽浪系土器（注１）や銅鏡片、素環頭刀子が出土したほか、朝妻遺跡では舶載鏡の破鏡が出土した。台地西端の大規模な集落の東方に、中郷遺跡や朝妻遺跡、ヘボノ木遺跡といった比較的小規模な集落が点在する様子が窺える。

古墳時代には、弥生時代終末期の甕棺墓を伴い、筑後地方最古の古墳と考えられる祇園山古墳や、方墳群である福聚寺古墳群が造営される。

古代に入ると、高良山に神籠石式山城が築かれる。その築造年代は明らかではないが、白村江の戦により対外防衛の必要に迫られた７世紀頃に築かれたと考えられている。高良川沿いの丘陵西端でも、同時期の大形建物や大溝が検出されており、国府設置前の公的施設（いわゆる「前身官衙」）とされている。前身官衙は７世紀末までに成立した筑後国の国府に継承されたとみられ、古宮地区には築地塀を伴う建物群がみられる。筑後国府跡や神道遺跡、山川前田遺跡では、この時期に比定される断層や噴砂痕が確認されている。『日本書紀』巻第二十九には、天武天皇七年（678）12月に筑紫国で大地震が起きたという記述があり、耳納山地北麓の水縄断層が震源とされている。これらの地震痕跡は、この「筑紫地震」の影響と考えられている。

筑後国府は、７世紀末から12世紀後半にかけて古宮地区から阿弥陀地区、朝妻地区、そして横道遺跡を三遷しており、300次を越える発掘調査から、古代の筑後国における政治経済の中心的な役割を担ったことが明らかになっている。また、山下遺跡では７～９世紀の溝や土坑から、緑釉陶器の香炉蓋や複数の越州窯系青磁碗が出土しており、『高良記』に登場する在国司居屋敷との関連が指摘されている。ヘボノ木遺跡では、８世紀中頃～９世紀前半に四面廂建物と八脚門、方形周溝を伴う回廊

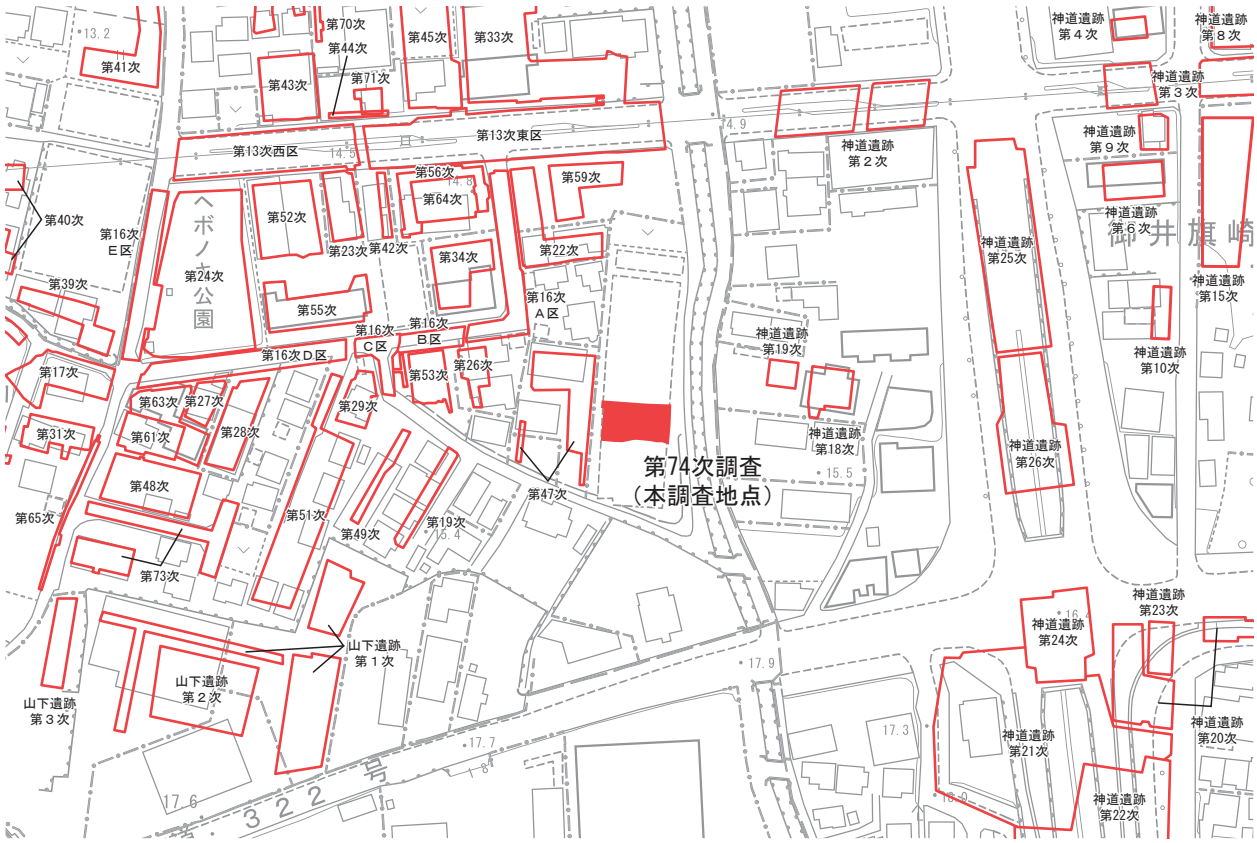
状遺構が造営される。これらの遺構は数回の建て替えが確認されており、その性格は御井郡衙とする説と、寺院とする説がある（注２）。なお、筑後国府跡からヘボノ木遺跡にかけては、東西に走る道路が検出されている。この道路はヘボノ木遺跡で北方と東方の二手に分かれ、前者は大宰府へ向かう推定駅路、後者は山本・竹野・生葉郡へ向かう伝馬道とされている。同時期の集落遺跡は、ヘボノ木遺跡の北東部に７世紀後半～８世紀中頃の竪穴建物群が分布し、久保野遺跡や山下遺跡、神道遺跡、篠田遺跡、二本木遺跡でも８～９世紀の竪穴建物、吹上遺跡で10～11世紀の掘立柱建物が検出されるなど、広範囲に集落遺跡が分布する。また、西小路遺跡では方形区画溝を伴う10～11世紀の掘立柱建物群が検出されており、屋敷の存在が示唆される。

11世紀末に筑後国府が朝妻地区から横道遺跡に移転したことに伴い、主要道も高良山麓の街道（後の薩摩街道）へ移ったと考えられている。ヘボノ木遺跡の伝馬路は11世紀まで存続するが、12世紀には井戸や土坑、土壙墓が点在するのみとなる。隣接する西小路遺跡でも同様に土壙墓が点在するだけだが、山下遺跡では12世紀の溝や土坑が検出されており、筑後国府跡の区画溝や下見遺跡の13世紀の館跡と共に、丘陵上に集落が点在したことを示唆する。薩摩街道沿いでは、二本木遺跡で10～11世紀に遺構が増加し、麓遺跡では12世紀後半の方形館の周溝が検出されており、薩摩街道の下限を示す。12～13世紀には、篠田遺跡や二本木遺跡、岩井川遺跡、安養寺境内遺跡、麓遺跡、日出原遺跡、日出原南遺跡、高良山大祝邸跡、高良山大宮司邸跡で溝や井戸、地下式壙などの土坑が多数検出された。街道沿いや高良大社の門前に、今日の御井町の前身にあたる集落があったことが窺える。

【注】

（１）白木守「【資料紹介】久留米市ヘボノ木遺跡出土の楽浪系土器」　福岡考古談話会『福岡考古』第18号　平成11年

（２）小澤太郎「寺院か官衙か－福岡県久留米市所在ヘボノ木遺跡の機能をめぐって－」　『古代東国の考古学』　平成17年



第２図　調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

Ⅲ．調査の記録

１．基本層序

調査地点の現況は畑地だが、以前はビニールハウスが並んでいた。そのため地表約0.1～0.2mを①耕作土が覆う。その下に、②褐色土を含む灰褐色土が約0.1m見られ、調査区北半の壁面には、③嵩上げに伴うとみられる厚さ0.3～0.4mの黄色および灰白色の砂質土が堆積する。これらの下層に④厚さ0.3mの礫や灰色土を含む灰褐色土や⑤包含層である礫や土器片を含む0.2mの黒褐色土、⑥礫を含む0.1mのオリーブ黒色土を経て、地表から0.9～1.3m、標高13.4～13.9mの地山面に至る。遺構は、この地山面で確認した。地山は、調査区の西部が礫を多く含む浅黄色と灰色の砂質土、西部が礫を含むにぶい橙色の砂質土である。

２．検出遺構

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居１基、ピット１基、埋甕２基、古代の土坑３基、ピット２基、火葬墓１基、中世の土坑３基、その他多数のピットを検出した。以下、主な遺構について年代ごとに述べる。

第３図　ヘボノ木遺跡第74次調査遺構配置図（1/150）

第４図　調査区全景（南上空から）

第５図　ＳＩ270 完掘状況（北西から）

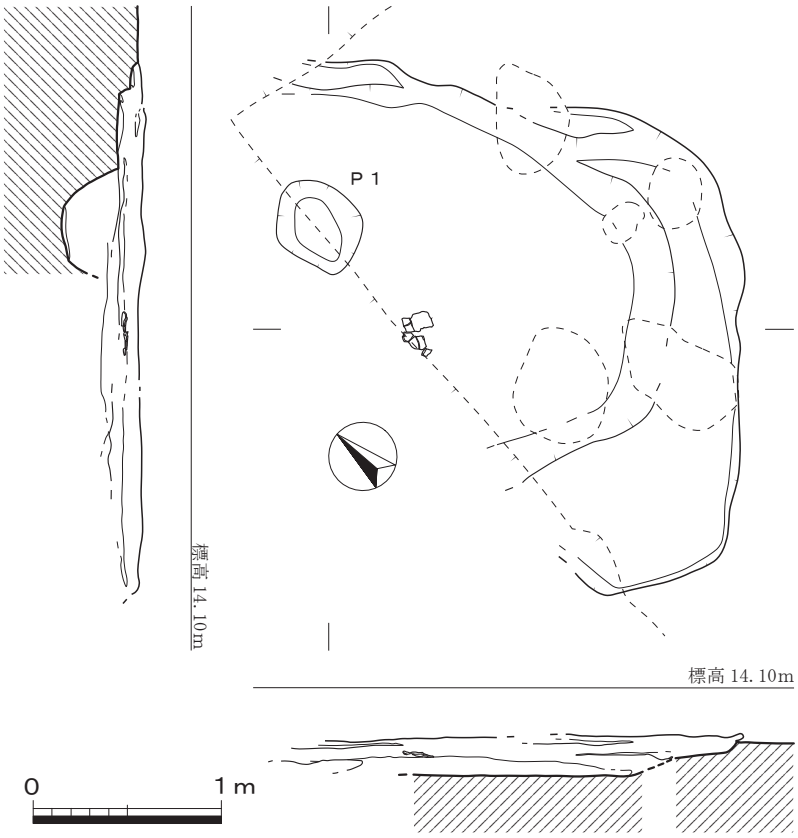
第６図　ＳＩ270 土器出土状況（西から）

縄文時代の遺構

竪穴住居

ＳＩ270（第５～７図）

調査区北東部で検出した竪穴住居である。焼土や炭化物の集中など、炉の痕跡は見つからなかったが、底面に直径0.42～0.53m、深さ0.32mの柱穴とみられるピットを有することや、平面形から竪穴住居と判断した。表土剥ぎの際に遺構の西半を削平してしまったが、小判形の平面を有していたと推定できる。検出したのは長軸3.05m、短軸2.53mのみで、底面までの深さは最大で0.25mを測る。隣接する調査区の壁面で遺構の断面を確認できなかったので、長軸の規模は５mに収まると考えられる。埋土は、炭粒や礫、土器片を大量に含む黄褐色土だった。遺物は、浅鉢や深鉢、注口土器の



第７図　ＳＩ270実測図（1/40）

注口部など約400点の細片を含むビニール袋２袋分の縄文土器と、サヌカイト製の打製石鏃、黒曜石や安山岩、サヌカイトの剥片が出土した。

ピット

ＳＰ160（第８・11図）

調査区中央部西寄りで検出したピットである。歪な隅丸方形の平面を呈し、長さ0.68ｍ、幅0.41ｍ、深さ0.11ｍを測る。出土遺物は、縄文土器の甕の底部１点と片岩などの礫２点である。

埋甕

ＳＸ２（第９・11図）

調査区北東部で検出した。掘方は円形の平面を呈し、直径0.33～0.38ｍ、深さは最大で0.20ｍを測る。埋土は、にぶい褐色土が占める。埋甕は底部と胴部で接合せず、出土状況から既に割れた状態で埋置した可能性がある。埋甕以外の遺物は出土しなかった。

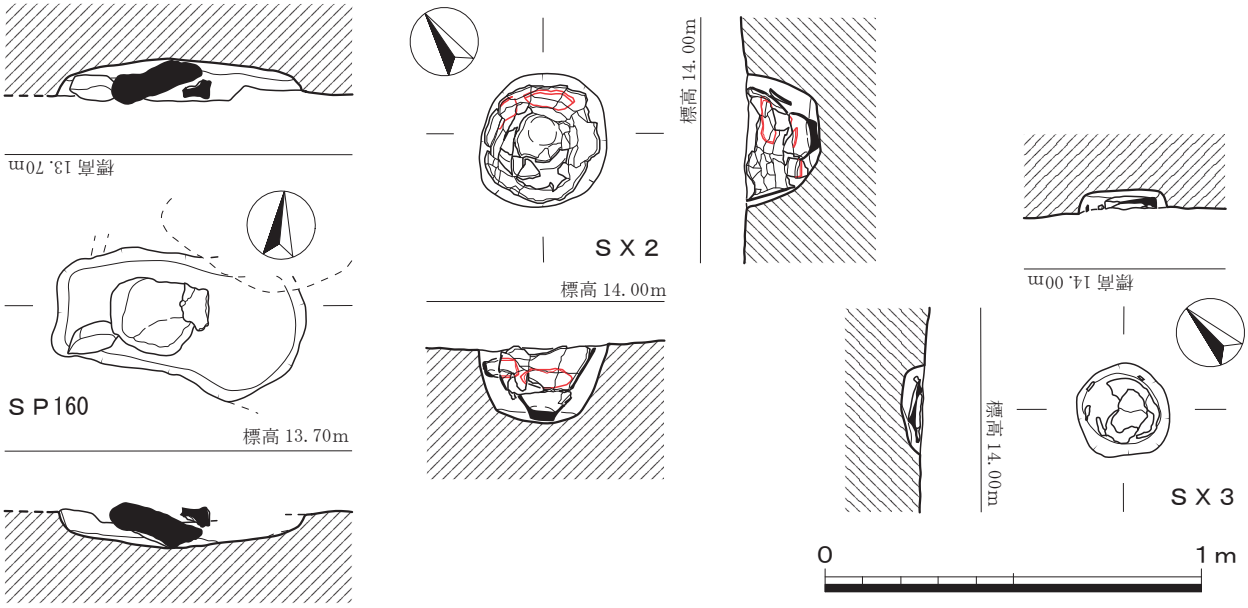
ＳＸ３（第10・11図）

調査区北東部で検出した。削平が特に著しく、検出したのは底面の５㎝のみで、埋甕も底部のみが残存していた。掘方は円形の平面を呈し、直径0.25～0.26ｍを測る。埋土は炭粒を含む黒褐色土が占めた。埋甕以外の出土遺物は無い。

第８図　ＳＰ160 土器出土状況（南から）

第９図　ＳＸ２検出状況（南西から）

第 10 図　ＳＸ３検出状況（北から）



第11図　ＳＰ160、ＳＸ２・３実測図（1/20）

古代の遺構

土坑

ＳＫ161（第12・13図）

調査区南西部で検出した、歪な楕円形の平面を有する土坑である。長さ1.33ｍ、幅1.03ｍ、深さは0.17ｍを測る。土坑の北部はピットが後出する。埋土は、炭粒を含む黄褐色砂質土が占める。出土遺物は、縄文土器や土師器の甕の細片、焼成粘土塊、黒曜石の剥片のほか、長さ28cm、幅13～15cm、重さ7.5kgの石英塊が出土した。

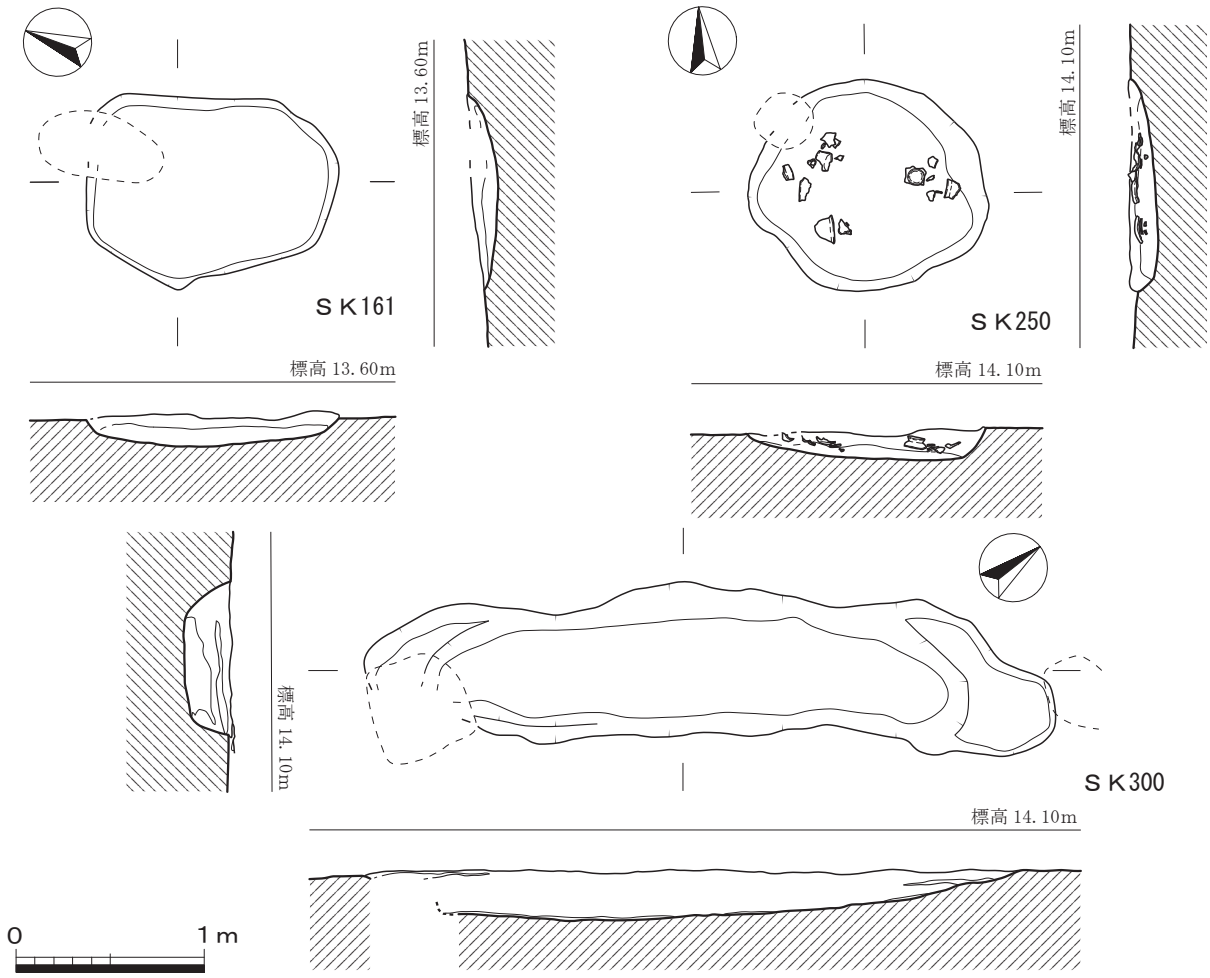
第 12 図　ＳＫ161 石英出土状況（南東から）

ＳＫ250（第13・14図）

調査区中央部南寄りで検出した、歪な円形の平面を有する土坑である。遺構の西辺をピットが削平する。長さ1.28ｍ、幅1.12ｍ、深さは最大で0.17ｍを測る。埋土は、橙色土ブロックを含む砂質の暗灰黄色土と黄灰色土だった。出土遺物は、土師器の坏や埦、甕、把手、黒色土器Ａ類の埦、須恵器甕の胴部片、焼成粘土塊、黒曜石の剥片がある。

ＳＫ300（第13・15図）

調査区南東部で検出した、細長い不定形の平面を有する土坑である。両端はピットが後出する。長さ3.64ｍ、幅0.82ｍで、深さは最大で0.26ｍを測る。底面は緩やかな船底状で、両端に段を有する。埋土は、土器片や礫を含む黒褐色土が占める。遺物は、縄文土器や弥生土器の甕、短頸壺、高坏、土師器の坏や甕の細片、用途不明の土製品、黒曜石製の打製石鏃と赤色チャート製のスクレイパー、黒曜石やサヌカイト、石英の剥片が出土した。縄文土器と弥生土器、古代の土師器が混在するが、土師器の細片が最も多く出土していることから、古代の遺構と判断した。



第13図　ＳＫ161・250・300実測図（1/40）

第 14 図　ＳＫ250 遺物出土状況（北東から）

第 15 図　ＳＫ300 完掘状況（南から）

ピット

ＳＰ275（第16・17図）

調査区東部で検出した、楕円形の平面を有するピットである。ピットの直径は0.18～0.29ｍ、深さは最大で0.17ｍを測る。ピットの深さ0.12ｍ付近に土師器の埦２点が割れた状態で埋没していた。埋土は、土器片や炭粒を含む褐灰色土だった。土師器埦以外の出土遺物は、土師器の坏や黒色土器Ａ類の埦の破片のみである。

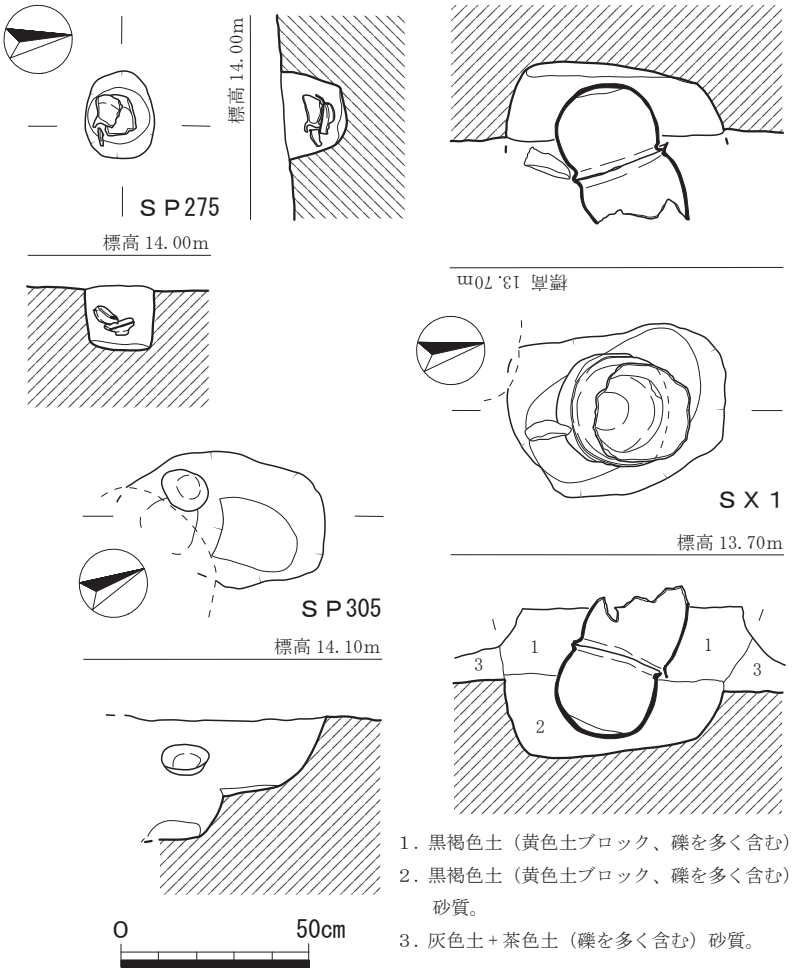
ＳＰ305（第16・18図）

調査区東部壁際で検出したピットである。南部は別のピットが後出するが、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。残存長0.53m、幅0.38m、深さは最大で0.34mを測る。ピットの深さ0.2m付近に段があるほか、深さ0.15m付近に土師器坏が直立した状態で埋没していた。坏以外には、土師器の坏蓋や坏、甕の細片、黒曜石の剥片が出土した。

火葬墓

ＳＸ１（第16・19・20図）

調査区南西部で検出した遺構である。土師器甕を合口式に埋納しており、過去にヘボノ木遺跡で検出された遺構に準拠して火葬墓とした。ただし、内部の埋土に火葬骨や炭化物、焼土が確認できなかったため、埋納遺構など他の用途も考えられる。甕の埋置角は72°を測る。表土剥ぎ中に検出したため、上甕の上部は割れた状態で検出したが、内部は空洞で、下甕に粘質土が数cm堆積していた。甕の内部から土師器の皿が出土したが、破片であり、表土剥ぎ中の混入である可能性が高い。掘方は検出面で長さ0.58m、幅0.46m、深さ0.21mを測るが、上甕の位置から実際の深さは0.6m以上あったと考えられる。掘方の埋土は、黄色土ブロックや礫を多く含む黒褐色土だった。明瞭な石組などは無いが、片岩の破片が下甕に乗った状態で出土したほか、弥生土器の甕や土師器の坏、皿、甕の破片が掘方から出土した。



第16図　ＳＰ275・305、ＳＸ１実測図（1/20）

第17図　ＳＰ275 土器出土状況（西から）

第18図　ＳＰ305 土器出土状況（北西から）

第19図　ＳＸ１上甕出土状況（南東から）

第20図　ＳＸ１下甕出土状況（南東から）

中世の遺構

土坑

ＳＫ230（第21・23図）

調査区南東部壁際で検出した土坑である。遺構の南半は調査区外に及ぶが、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは東西1.87m、南北1.22mで、深さは最大で0.45mを測る。地山直上の包含層に後出し、土坑周囲の遺構にも後出する。埋土は礫を多く含み、灰黄褐色砂質土が占めるが、底面付近は灰黄褐色土も含む。遺物は、土師器の坏や甕の細片、貿易陶磁器が出土した。

ＳＫ240（第21・23図）

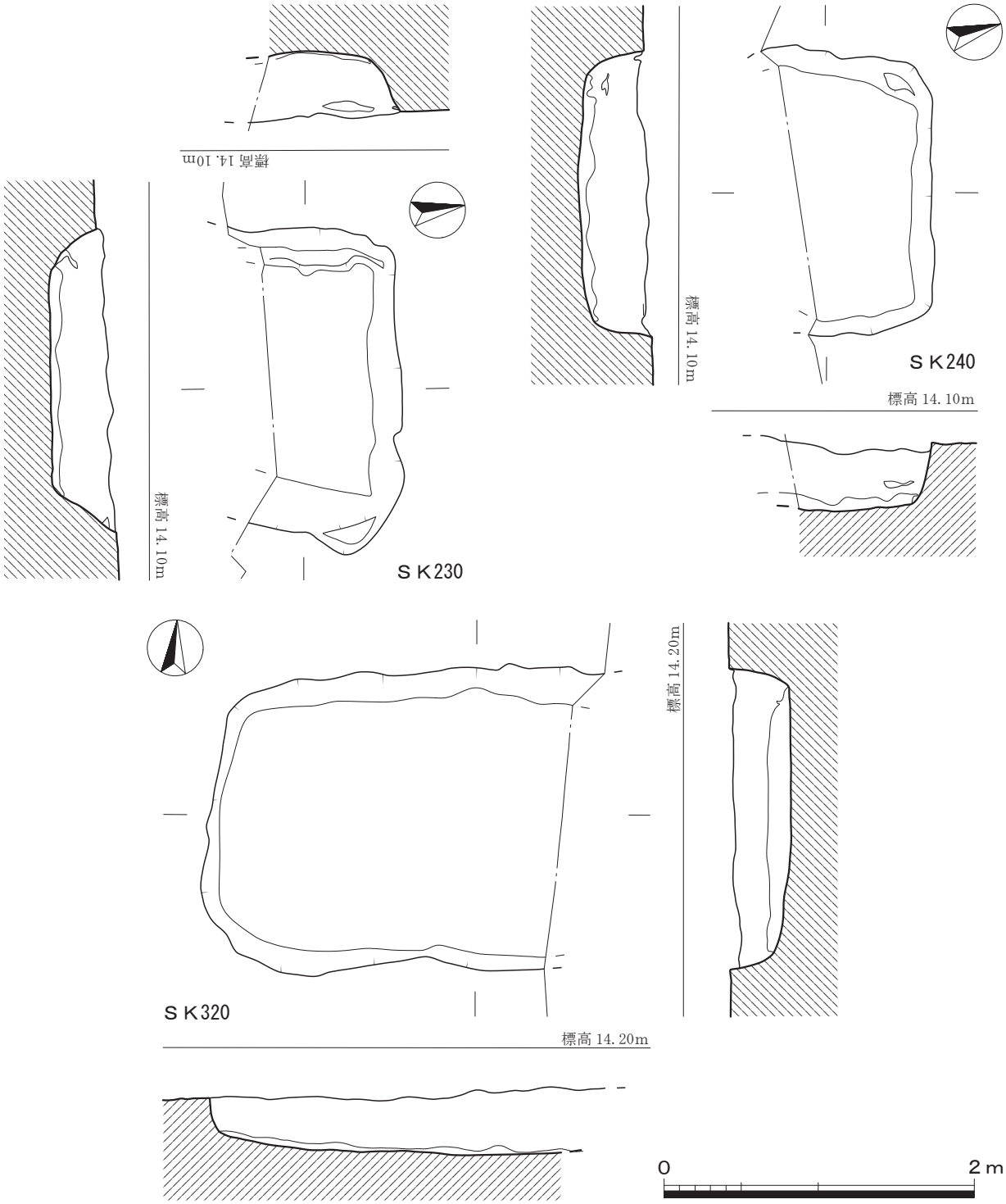
調査区南東部壁際で検出した土坑である。遺構の南半は調査区外に及ぶが、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは東西2.07m、南北1.24mで、深さは最大で0.46mを測る。地山直上の包含層に後出し、土坑周囲の遺構にも後出する。埋土は礫を多く含む暗灰黄色から黄灰色の砂質土である。出土遺物は、土師器の坏や皿、甕の細片のみである。坏や皿の底部は糸切り底だった。

ＳＫ320（第22・23図）

調査区南東部壁際で検出した土坑である。遺構の東部は調査区外に及び、歪な隅丸方形の平面を有するとみられる。検出したのは東西2.62m、南北1.98mで、深さは最大で0.43mを測る。地山直上の包含層に後出し、土坑周囲の遺構にも後出する。埋土は礫を多く含み、灰黄褐色砂質土が占めるが、底面付近は灰黄褐色土も含む。遺物は、土師器の坏や皿、埦、甕、黒色土器Ｂ類の埦、白磁碗の細片、黒曜石の剥片が出土した。坏や皿の底部は糸切り底で占められる。

第21図　ＳＫ230・240完掘状況（北東上空から）

第22図　ＳＫ320完掘状況（東から）

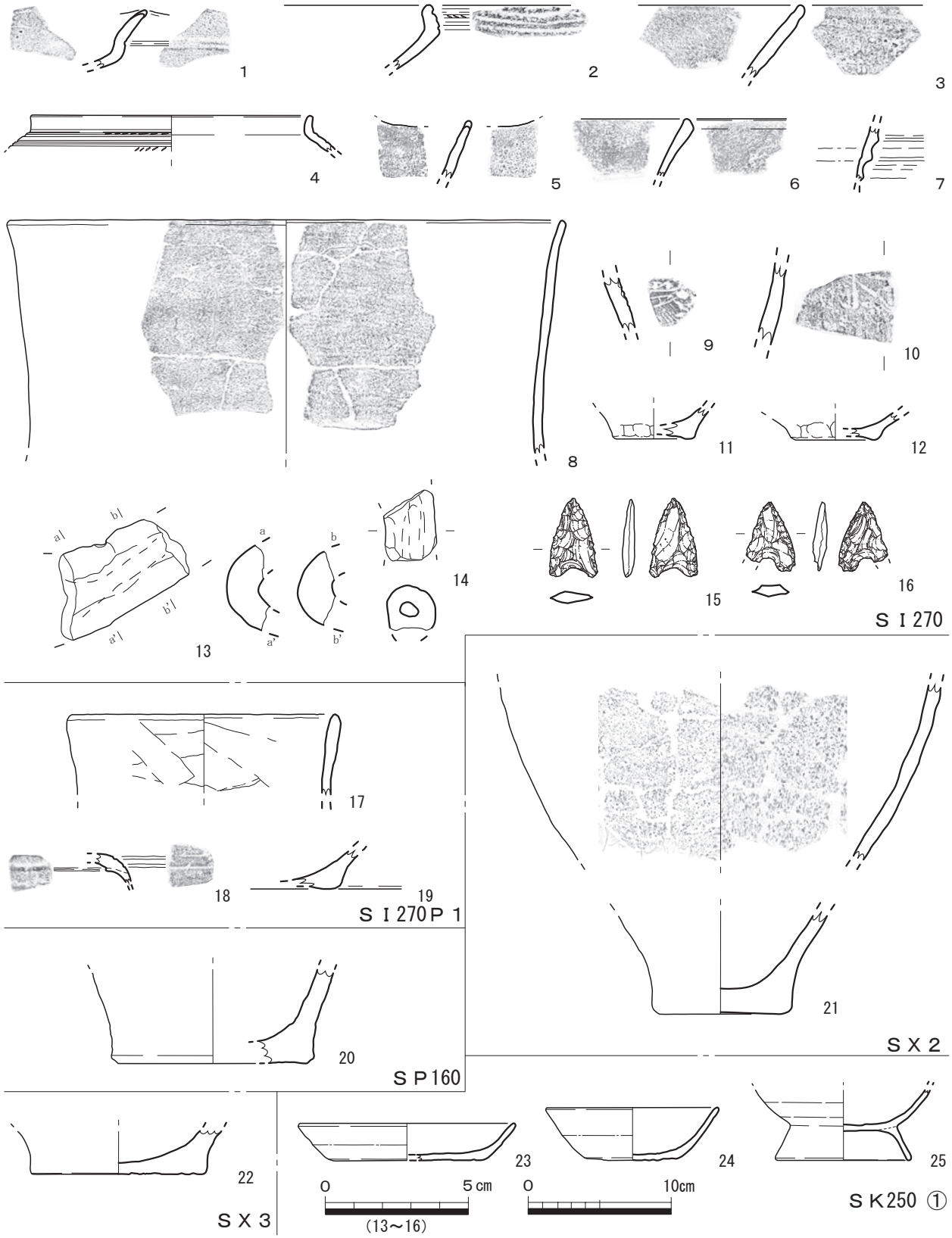


第23図　ＳＫ230・240・320実測図（1/40）

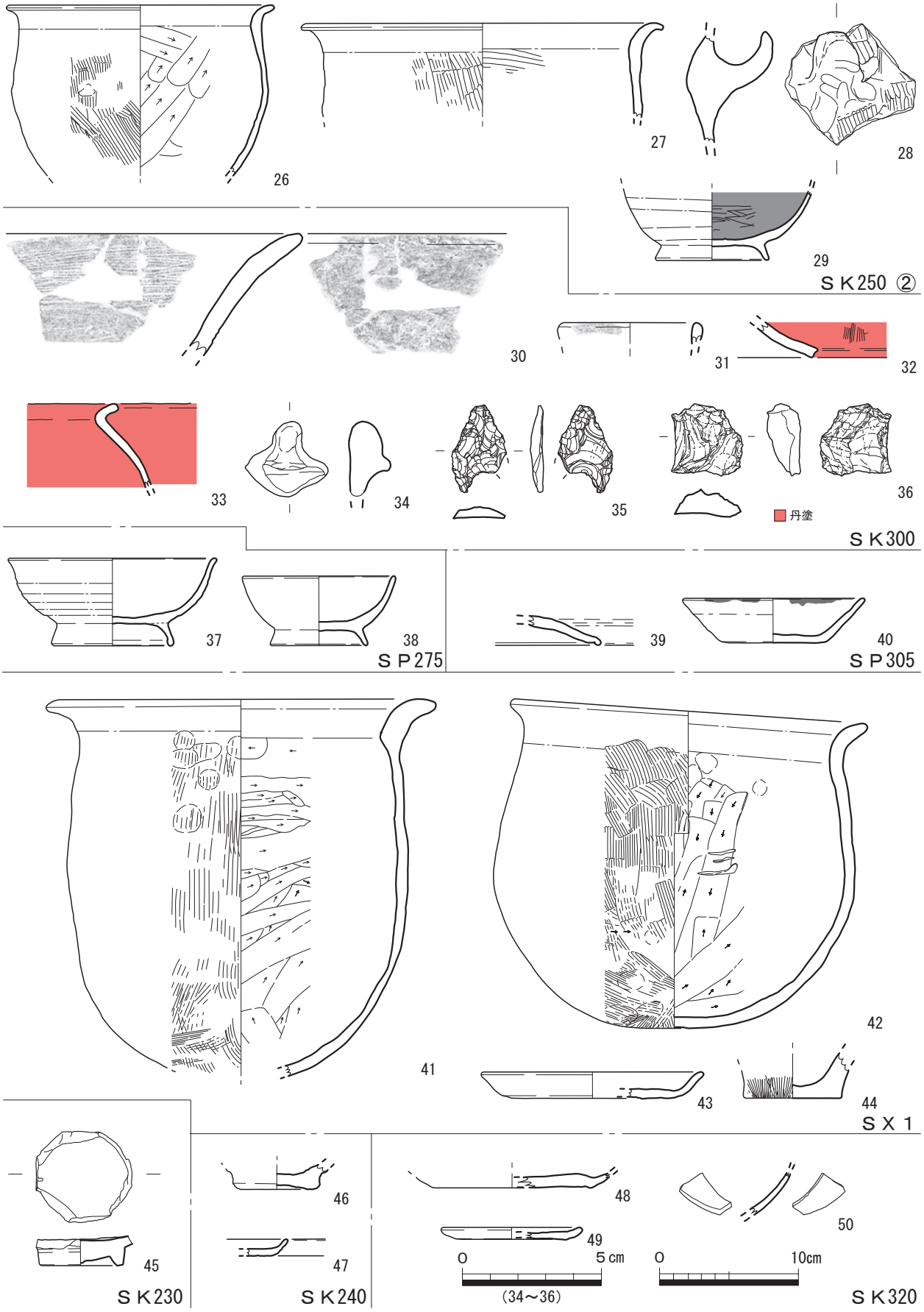
３．出土遺物（第24～31図、第１・２表）

合計でパンコンテナー５箱分の遺物が出土した。大半を縄文土器と古代の土師器、黒曜石の剥片が占め、併せて弥生土器や古代の黒色土器Ａ類・Ｂ類、須恵器、中世の土師器、貿易陶磁器、打製石鏃などの石製品、鉄滓とみられる鉄製品が出土した。なお、表土からも黒色土器Ｂ類の埦の細片、正格子目叩きや縄目叩きの古瓦、玉縁を有する白磁碗や同安窯系の青磁碗などの貿易陶磁器、滑石製石鍋、近世の陶器の破片が出土している。以下、個々の遺物の詳細は遺物観察表を参照願いたい。

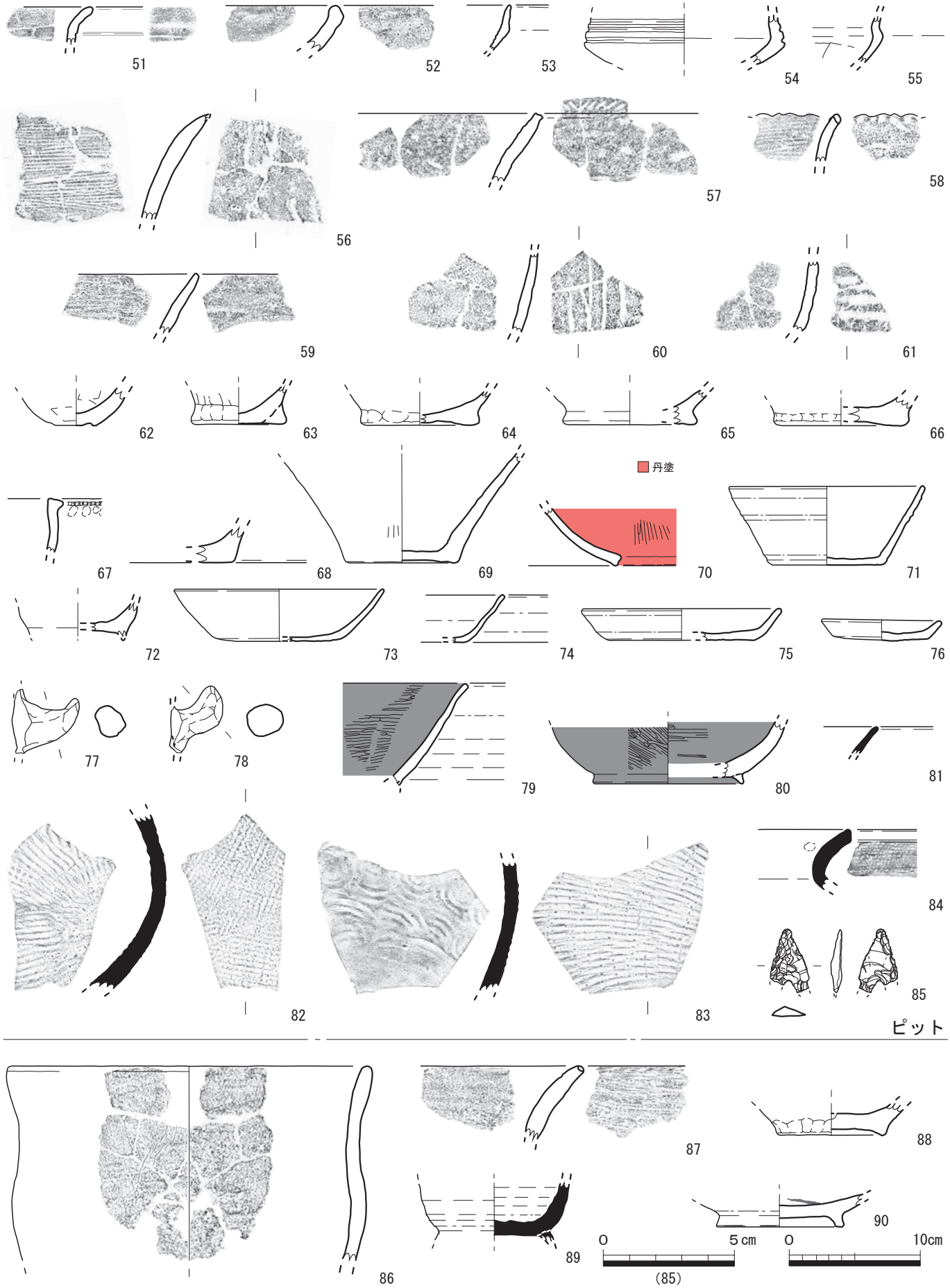
【遺物観察表について】・第24～31図と第１・２表の遺物番号は同一である。
・〔 〕は復元値を、（ ）は残存値を、－は欠損または該当する部位が無いことを意味する。
・胎土は、0.5㎜未満の砂粒を「微砂粒」、１㎜未満を「細砂粒」、１㎜以上を「砂粒」とした。
・貿易陶磁器の分類は、大宰府分類（太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ＸＶ　陶磁器分類編』太宰府市の文化財第49集　平成12年）に拠った。
・遺物番号は、久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。



第24図　出土遺物実測図１（1/4、1/2）



第25図 出土遺物実測図２（1/4、1/2）



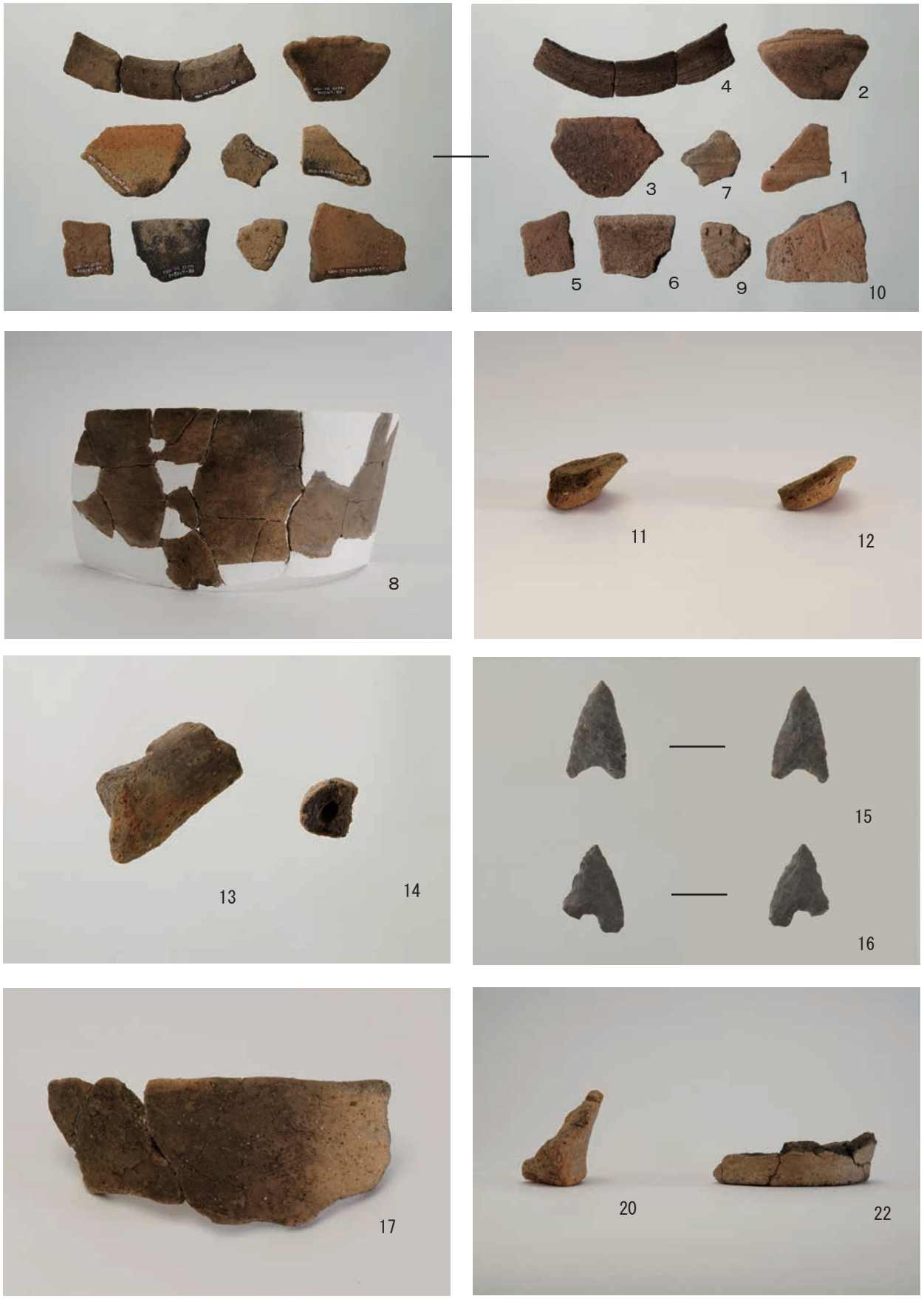
第26図 出土遺物実測図３（1/4、1/2）

第１表　出土遺物観察表１

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量（cm）			色調		調整・文様			胎土 石材	重量・備考	登録番号
				口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	外面	内面	外面	内面	底面・高台（側面）			
1 第24図	ＳＩ270	縄文土器	浅鉢	—	—	(4.0)	橙色	浅黄橙色	沈線１条 摩耗	摩耗	—	微砂粒、雲母を含む	波状口縁 二次被熱で摩耗	202107 000085
2 第24図	ＳＩ270	縄文土器	浅鉢	—	—	(4.5)	浅黄橙色～にぶい黄橙色	灰黄褐色	横ナデ 沈線３条・刻目	横ナデ	—	砂粒を多く含む	外面煤ける	202107 000084
3 第24図	ＳＩ270	縄文土器	浅鉢	—	—	(5.0)	灰褐色	橙色～にぶい橙色	横ナデ	横ナデ	—	砂粒を含む	外面若干煤ける	202107 000106
4 第24図	ＳＩ270	縄文土器	鉢	〔18.8〕	—	(2.5)	にぶい褐色～灰褐色	灰黄褐色	横ナデ 沈線４条・刻目	横ナデ	—	微砂粒、雲母を含む		202107 000082
5 第24図	ＳＩ270	縄文土器	鉢	—	—	(3.8)	にぶい黄橙色	浅黄橙色	横ナデ	横ナデ	—	微砂粒を含む	外面の一部煤ける	202107 000091
6 第24図	ＳＩ270	縄文土器	鉢	—	—	(4.0)	にぶい橙色	にぶい褐色	横ナデ	横ナデ	—	砂粒を多く含む	波状口縁	202107 000089
7 第24図	ＳＩ270	縄文土器	鉢	—	—	(4.0)	灰白色～灰黄褐色	淡黄色～黒色	横ナデ	横ナデ$_{ヵ}$ 摩耗	—	砂粒を多く含む		202107 000088
8 第24図	ＳＩ270	縄文土器	深鉢	〔28.6〕	—	(16.3)	灰黄褐色～にぶい黄橙色	黒褐色～灰黄褐色	ミガキ	ミガキ	—	砂粒を含む	内外面に黒斑	202107 000108
9 第24図	ＳＩ270	縄文土器	深鉢	—	—	(3.6)	にぶい黄橙色	浅黄橙色	沈線４条 縄文・列点文	ナデ	—	微砂粒、雲母を含む	胴部片	202107 000092
10 第24図	ＳＩ270	縄文土器	深鉢	—	—	(5.8)	橙色～浅黄橙色	橙色～にぶい橙色	縦ナデ	横ナデ	—	砂粒を多く含む	刻文「×」	202107 000093
11 第24図	ＳＩ270	縄文土器	鉢	—	〔5.2〕	(2.7)	にぶい褐色～橙色	灰褐色	横ナデ 指オサエ	ナデ	ナデ	砂粒、褐色粒子を含む	上げ底	202107 000098
12 第24図	ＳＩ270	縄文土器	鉢	—	〔5.6〕	(1.9)	橙色～浅黄橙色	にぶい黄橙色	横ナデ 指オサエ	横ケズリ$_{ヵ}$	ナデ	砂粒を含む	上げ底	202107 000099
13 第24図	ＳＩ270	縄文土器	注口土器	—	—	(4.2)	浅黄橙色～灰黄褐色	にぶい赤褐色	ナデ	穿孔	—	精良。砂粒を含む		202107 000100
14 第24図	ＳＩ270	縄文土器	不明製品	(2.45)	(1.85)	1.65	橙色	にぶい橙色	ナデ	未貫通の穿孔	—	砂粒、雲母、赤色粒子を含む		202107 000107
15 第24図	ＳＩ270	石製品	打製石鏃	2.4	1.7	0.4	灰色		敲打痕		—	安山岩	1.55ｇ	202107 000101
16 第24図	ＳＩ270	石製品	打製石鏃	2.4	(1.7)	0.5	黒色		敲打痕		—	安山岩	基部折損 (2.00)ｇ	202107 000102
17 第24図	ＳＩ270 Ｐ１	縄文土器	深鉢	〔16.4〕	—	(5.6)	褐灰色～浅黄橙色	灰黄褐色～黄橙色	工具ナデ	工具ナデ	—	砂粒を多く含む	内外面煤ける	202107 000143
18 第24図	ＳＩ270 Ｐ１	縄文土器	浅鉢$_{ヵ}$	—	—	(2.1)	にぶい褐色～にぶい橙色	黒褐色～にぶい褐色	横ナデ 沈線２条	横ナデ	—	細砂粒、雲母を含む	内面接合痕あり、煤ける	202107 000144
19 第24図	ＳＩ270 Ｐ１	縄文土器	鉢	—	—	(2.7)	橙色～浅黄橙色	にぶい黄橙色	摩耗	縦ナデ	未調整	微砂粒を含む		202107 000145
20 第24図	ＳＰ160	縄文土器	甕	—	〔13.2〕	(6.6)	橙色	にぶい黄橙色	縦ナデ	ナデ	ナデカ	砂粒を多く含む		202107 000039
21 第24図	ＳＸ２	縄文土器	深鉢	—	8.6	〔20.1〕合成	灰黄褐色～橙色	灰色～橙色	横ナデ 縦ナデ	横ナデ ナデ	ナデ	砂粒を多く含む	外面胴部煤ける 内面胴部赤変	202107 000005
22 第24図	ＳＸ３	縄文土器	深鉢	—	12.0	(3.0)	にぶい橙色	褐灰色	ナデ 指オサエ	ナデ	未調整	砂粒を多く含む		202107 000006
23 第24図	ＳＫ250	土師器	坏	〔14.8〕	〔10.8〕	2.6	橙色	灰黄褐色～橙色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	ヘラ切り 摩耗	精良。赤色粒子を含む	摩耗著しい	202107 000071
24 第24図	ＳＫ250	土師器	坏	〔11.8〕	〔6.6〕	3.7	にぶい黄橙色～黒色	にぶい黄橙色～橙色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り 未調整	精良。赤色粒子を含む	摩耗著しい 外面底部黒変	202107 000075
25 第24図	ＳＫ250	土師器	埦	—	19.2	(5.0)	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り 接合ナデ	精良。赤色粒子を多く含む	外面摩耗著しい	202107 000076
26 第25図	ＳＫ250	土師器	甕	〔16.6〕	—	(12.0)	橙色～黒色	にぶい橙色～にぶい褐色	刷毛目 回転ナデ	ケズリ 回転ナデ	—	砂粒、褐色粒子、黒色粒子を含む	外面に黒斑、二次被熱	202107 000077
27 第25図	ＳＫ250	土師器	甕	〔24.6〕	—	(6.8)	橙色～にぶい黄橙色	にぶい橙色～にぶい黄橙色	刷毛目 回転ナデ	刷毛目 回転ナデ	—	砂粒、赤色粒子を含む	外面に二次被熱	202107 000078
28 第25図	ＳＫ250	土師器	把手	(6.2)	(9.3)	(8.8)	にぶい黄橙色～黒色	橙色	ハケ目 オサエ	接合ナデ	—	精良。赤色粒子、石粒を含む	外面の大半黒変	202107 000072
29 第25図	ＳＫ250	黒色土器Ａ類	埦	—	7.8	(4.9)	橙色～にぶい黄橙色	黒色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ヘラミガキ	ヘラ切り 接合ナデ	精良。雲母、赤色粒子を含む	底部片	202107 000073
30 第25図	ＳＫ300	縄文土器	深鉢	—	—	(8.8)	にぶい橙色	灰褐色～にぶい橙色	横ナデ 刻目文	横方向の条痕	—	砂粒を多く含む		202107 000119
31 第25図	ＳＫ300	縄文土器	鉢	〔9.5〕	—	(2.5)	淡黄橙色	淡黄橙色～にぶい黄橙色	横ナデ 縄文ＲＬ	横ナデ	—	微砂粒を含む		202107 000121
32 第25図	ＳＫ300	弥生土器	高坏	—	—	(2.5)	明赤褐色～にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ミガキ 丹塗	横ナデ	横ナデ 丹塗剥離	砂粒を多く含む	底部片	202107 000125
33 第25図	ＳＫ300	弥生土器	短頸壺	—	—	(6.0)	明赤褐色	にぶい赤褐色	ナデ消し 横ナデ	ナデ消し 横ナデ	—	精良。砂粒、雲母を含む	外面丹塗	202107 000124
34 第25図	ＳＫ300	土製品	不明製品	(2.7)	(2.95)	1.5	橙色～にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ 横ナデ	ナデ	—	砂粒を多く含む		202107 000128
35 第25図	ＳＫ300	石製品	打製石鏃	3.1	(2.0)	0.5	黒色		敲打痕		—	黒曜石	基部折損 (2.00)ｇ	202107 000126
36 第25図	ＳＫ300	石製品	スクレイパー	2.6	2.6	1.2	赤色		敲打痕		—	赤チャート	7.10ｇ	202107 000127
37 第25図	ＳＰ275	土師器	埦	〔14.7〕	〔8.4〕	6.3	橙色～黒色	橙色～にぶい橙色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り 接合ナデ	精良。赤色粒子を多く含む	外面底部に黒斑	202107 000111
38 第25図	ＳＰ275	土師器	埦	〔10.8〕	〔7.8〕	5.0	橙色		回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	ヘラ切り 摩耗	精良。赤色粒子を含む	摩耗著しい	202107 000112
39 第25図	ＳＰ305	土師器	坏蓋	—	—	(2.1)	浅黄橙色	暗灰黄色～黄橙色	ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	—	精良。雲母、褐色粒子を含む	内外面口縁部に煤付着	202107 000132
40 第25図	ＳＰ305	土師器	坏	12.6～13.0	7.4～7.5	3.1～3.2	黒褐色～橙色	黒色～橙色	回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。雲母、褐色粒子を含む	口縁部やや歪む 内外面に油煙・黒斑	202107 000133
41 第25図	ＳＸ１	土師器	甕	27.2～28.0	—	(27.1)	橙色	橙色	刷毛目 回転ナデ	ケズリ 回転ナデ	—	砂粒を含む		202107 000001
42 第25図	ＳＸ１	土師器	甕	24.8～26.0	7.0	21.9～23.7	橙色～黒色	橙色	刷毛目 回転ナデ	ケズリ・オサエ 回転ナデ	ケズリ	砂粒を含む	胴部径：26.0cm 外面に黒斑２ヶ所	202107 000002
43 第25図	ＳＸ１ 甕内部	土師器	皿	〔15.6〕	〔12.8〕	1.9	橙色～にぶい橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り 板目圧痕	精良。褐色粒子を含む		202107 000003
44 第25図	ＳＸ１ 掘方	弥生土器	甕	—	6.7	(3.2)	にぶい褐色	褐灰色	刷毛目	ナデ	未調整	砂粒を多く含む	底部片	202107 000004
45 第25図	ＳＫ230	貿易陶磁器	碗	—	6.0	(1.6)	灰白色（釉薬）	灰白色（胎土）	—	回転ナデ 施釉	ヘラケズリ 露胎	精良。黒色粒子を含む	白磁碗Ⅳ類 面子に転用	202107 000061

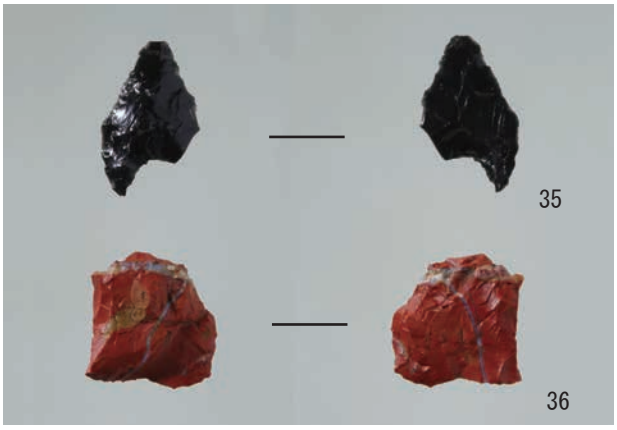
第２表　出土遺物観察表２

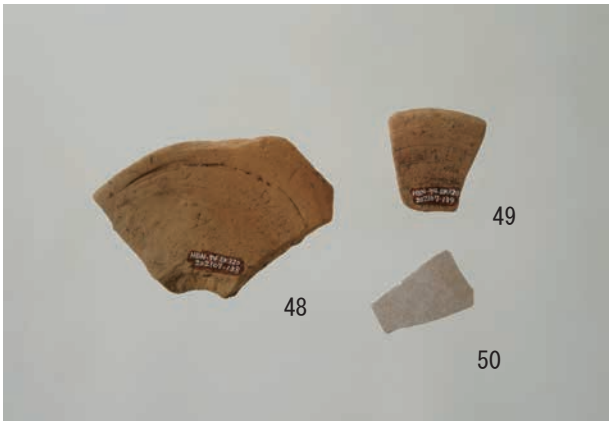
遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量（cm） 口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	色調 外面	内面	調整・文様 外面	内面	底面・高台（側面）	胎土 石材	重量・備考	登録番号
46 第25図	ＳＫ240	縄文土器	鉢	—	6.2	(1.8)	にぶい黄橙色 ～橙色	褐灰色～ にぶい黄橙色	ナデ 摩耗	ナデ 摩耗	ナデ	石粒を多く含む	底部片 摩耗著しい	202107 000065
47 第25図	ＳＫ240	土師器	小皿	—	—	1.2	にぶい黄色 ～灰褐色	にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	—	精良。雲母を含む		202107 000066
48 第25図	ＳＫ320	土師器	坏	—	〔11.2〕	(1.0)	黄橙色～ 浅黄橙色	橙色～ 灰黄色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	糸切り底 摩耗	精良。雲母、褐色粒子を含む		202107 000138
49 第25図	ＳＫ320	土師器	皿	〔9.7〕	〔7.2〕	1.85	橙色	橙色	回転ナデ	回転ナデ	糸切り 板目痕ヵ	精良。雲母、褐色粒子を含む		202107 000139
50 第25図	ＳＫ320	陶磁器	碗	—	—	(3.0)	灰白色 （釉薬）	灰白色 （胎土）	施釉	施釉	—	精良。黒色粒子を含む		202107 000142
51 第26図	ＳＰ36	縄文土器	浅鉢	—	—	(2.9)	淡黄色	淡黄色	沈線１条 横ナデ	横ナデ	—	微砂粒を多く含む		202107 000011
52 第26図	ＳＰ200	縄文土器	浅鉢	—	—	(3.4)	黒褐色～ にぶい黄橙色	黒褐色	横ナデ 指オサエ	横ナデ ナデ	—	砂粒、微砂粒を多く含む	口縁に黒斑 外面煤ける	202107 000050
53 第26図	ＳＰ238	縄文土器	浅鉢	—	—	(3.4)	褐灰色～ にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	横ナデ 摩耗	横ナデ 摩耗	—	砂粒を多く含む	口縁部片 摩耗著しい	202107 000063
54 第26図	ＳＰ333	縄文土器	浅鉢	—	—	(3.8)	灰色～ 浅黄橙色	灰黄褐色 ～浅黄橙色	横ナデ 沈線３条	工具ナデ	—	細砂粒、雲母を含む	胴部径：〔15.2〕cm 外面に黒斑と煤	202107 000147
55 第26図	ＳＰ43	縄文土器	浅鉢	—	—	(3.5)	黒褐色～ 浅黄橙色	灰褐色	横ナデ	横ナデ ケズリ	—	精良。微砂粒、雲母を含む	外面に黒斑	202107 000012
56 第26図	ＳＰ283	縄文土器	深鉢	—	—	(8.0)	淡黄橙色	淡黄橙色～ 灰黄褐色	ナデ	ナデ 貝殻条痕	—	砂粒、雲母を含む		202107 000114
57 第26図	ＳＰ96	縄文土器	深鉢	—	—	(5.2)	黒褐色～褐色	褐灰色～橙色	刻目	横ナデ	—	砂粒、雲母を多く含む		202107 000025
58 第26図	ＳＰ148	縄文土器	深鉢	—	—	(3.6)	にぶい黄橙色		横ケズリ 凹点文	横ケズリ	—	砂粒、微砂粒を含む		202107 000035
59 第26図	ＳＰ211	縄文土器	深鉢	—	—	(2.5)	にぶい黄橙色	浅黄色～ にぶい黄色	横ナデ	横ナデ ケズリ	—	礫、砂粒を含む	外面煤ける	202107 000055
60 第26図	ＳＰ84	縄文土器	鉢	—	—	(6.4)	暗赤褐色		凹線文	横ナデ	—	滑石を含む	61に類似	202107 000021
61 第26図	ＳＰ93	縄文土器	鉢	—	—	(5.6)	暗赤褐色	暗赤褐色	凹線文	ナデ	—	滑石を含む	60に類似	202107 000023
62 第26図	ＳＰ314	縄文土器	深鉢	—	3.1	(2.8)	にぶい黄褐色 ～橙色	にぶい黄橙色	横ナデ	縦ナデ	接合痕	ほぼ精良。砂粒、微砂粒を含む	外面煤ける	202107 000137
63 第26図	ＳＰ59	縄文土器	深鉢	—	〔6.2〕	(2.8)	黒褐色～橙色	黒色	横ナデ オサエ	ナデ	ナデ	砂粒、微砂粒、雲母を大量に含む	底部煤ける 二次被熱で摩耗	202107 000016
64 第26図	ＳＰ171	縄文土器	鉢	—	〔7.4〕	(2.55)	橙色	にぶい褐色	横ナデ 指オサエ	横ナデ ナデ	未調整	砂粒、微砂粒を含む	上げ底	202107 000042
65 第26図	ＳＰ171	縄文土器	鉢	—	〔8.8〕	(2.6)	浅黄橙色 ～橙色	黒褐色～ 浅黄橙色	横ナデ	横ナデ	未調整	微砂粒、黒色・褐色粒子を含む	内面煤ける	202107 000043
66 第26図	ＳＰ211	縄文土器	鉢	—	〔9.0〕	(2.65)	橙色～ にぶい橙色	にぶい黄橙色	指オサエ	ナデ	ナデ	砂粒、細砂粒を含む	上げ底	202107 000056
67 第26図	ＳＰ122	弥生土器	甕	—	—	(4.1)	にぶい橙色 ～黒褐色	にぶい褐色 ～灰褐色	刻目突帯 オサエ	ナデ	—	砂粒を多く含む		202107 000032
68 第26図	ＳＰ202	弥生土器	甕	—	—	(2.7)	橙色	にぶい黄褐色	摩耗	横ナデ	未調整	微砂粒を含む		202107 000052
69 第26図	ＳＰ263	弥生土器	甕	—	8.5	(8.35)	橙色～ にぶい黄橙色	褐灰色	刷毛目 摩耗	ナデ 摩耗	ナデ 未調整	砂粒を多く含む	摩耗著しい	202107 000080
70 第26図	ＳＰ241	弥生土器	高坏	—	—	(4.4)	明赤褐色～ にぶい赤褐色	にぶい黄橙色 ～灰黄褐色	ミガキ 丹塗	ナデ	横ナデ 丹塗	砂粒を含む	脚部片	202107 000067
71 第26図	ＳＰ23	土師器	埦	〔14.6〕	8.4	6.0	橙色		回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り 板目圧痕	精良	筑後型	202107 000009
72 第26図	ＳＰ206	土師器	埦	—	—	(2.6)	灰色	灰白色～ にぶい橙色	ヘラケズリ 摩耗	回転ナデ	摩耗	精良。細砂粒、褐色粒子を含む	外面二次被熱で摩耗 内面一部煤ける	202107 000054
73 第26図	ＳＰ263	土師器	坏	〔15.8〕	〔9.5〕	4.0	橙色～黒色	橙色	回転ナデ 摩耗	回転ナデ 摩耗	ヘラ切り 摩耗	砂粒、赤色粒子を多く含む	摩耗著しい 口縁部に黒変	202107 000081
74 第26図	ＳＰ167	土師器	坏	—	—	(3.6)	橙色	橙色～ にぶい橙色	回転ナデ	回転ナデ	摩耗	精良。褐色粒子、雲母を含む	内外面に門歯痕	202107 000041
75 第26図	ＳＰ62	土師器	皿	〔14.6〕	〔11.4〕	2.4	橙色		回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	精良。雲母を含む		202107 000017
76 第26図	ＳＰ79	土師器	小皿	8.5	6.1	1.4～ 1.7	にぶい褐色～ にぶい橙色	にぶい黄橙色	回転ナデ	回転ナデ ナデ	ヘラ切り 未調整	精良。雲母、赤色粒子を含む		202107 000020
77 第26図	ＳＰ274	土師器	把手	(5.1)	(4.9)	1.8	にぶい橙色 ～浅黄色	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	—	精良。砂粒、雲母を含む	外面煤ける	202107 000109
78 第26図	ＳＰ283	土師器	把手	(4.05)	(5.1)	2.7	黒色～ 灰黄褐色	淡黄橙色	ナデ 指オサエ	横ナデ	—	精良。砂粒、雲母を含む	外面に黒斑	202107 000115
79 第26図	ＳＰ19	黒色土器 Ａ類	埦	—	—	(7.2)	橙色～ 浅黄橙色	黒色	回転ナデ ヘラケズリ	ミガキ	—	精良。褐色粒子を含む		202107 000008
80 第26図	ＳＰ248	黒色土器 Ｂ類	鉢	—	〔11.4〕	(4.75)	黒色	黒褐色	ヘラミガキ 回転ナデ	回転ナデ ヘラミガキ	回転ナデ	精良	底部片	202107 000069
81 第26図	ＳＰ274	須恵器	坏	—	—	(2.0)	灰白色		回転ナデ	回転ナデ	—	精良。黒色粒子を含む	二次被熱を受ける	202107 000110
82 第26図	ＳＰ23	須恵器	甕	—	—	(13.4)	灰黄褐色 ～灰白色	灰黄褐色	格子目叩き	並行文叩き	—	砂粒、黒色粒子を多く含む	胴部片	202107 000010
83 第26図	ＳＰ235	須恵器	甕	—	—	(11.6)	灰色	灰色	並行文叩き	青海波文 叩き	—	石粒を若干含む	胴部片	202107 000062
84 第26図	ＳＰ248	須恵器	甕	—	—	(4.6)	灰白色～暗灰色		格子目叩き 回転ナデ	回転ナデ	—	精良。石粒を含む	口縁部片	202107 000070
85 第26図	ＳＰ304	石製品	打製 石鏃	(2.4)	(1.5)	0.4	黒色		敲打痕		—	黒曜石	基部折損 (0.95) g	202107 000131
86 第26図	遺構面	縄文土器	深鉢	〔27.2〕	—	(14.8)	褐灰色～ 浅黄橙色	灰色～ 浅黄橙色	縦ナデ 横ナデ	縦ナデ 横ナデ	—	砂粒を多く含む	外面煤ける	202107 000148
87 第26図	遺構面	縄文土器	深鉢	—	—	(5.6)	にぶい黄橙色 ～橙色	黒褐色～ 灰褐色	横ケズリ 刻目文	横ケズリ ナデ	—	砂粒、微砂粒を多く含む	内面煤ける	202107 000045
88 第26図	遺構面	縄文土器	深鉢	—	〔7.4〕	(2.4)	にぶい黄橙色 ～橙色	浅黄色	ナデ 指オサエ	ナデ	ナデ	砂粒を多く含む	上げ底	202107 000150
89 第26図	遺構面	須恵器	壺	—	—	(4.4)	灰白色	灰白色	ヘラケズリ 接合ナデ	ヘラケズリ 回転ナデ	ヘラ切り 接合ナデ	精良。微砂粒、黒色粒子を含む		202107 000151
90 第26図	包含層	土師器	鉢	—	9.4	(2.45)	灰黄褐色 ～橙色	にぶい橙色～ にぶい黄褐色	ヘラケズリ 接合ナデ	回転ナデ	ヘラ切り 接合ナデ	精良。細砂粒、雲母を含む	内面に油煙 高台に板目圧痕	202107 000153



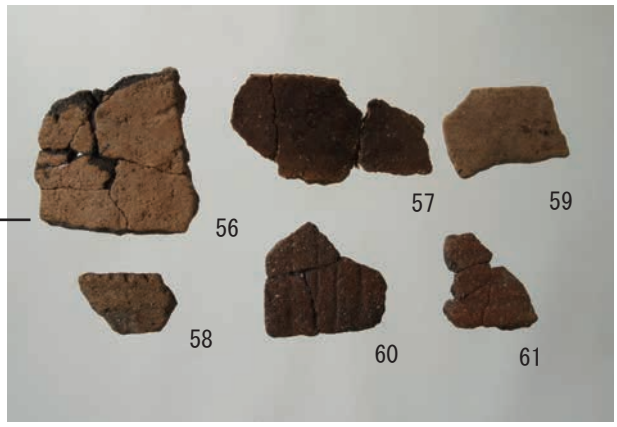
第 27 図　出土遺物写真 1

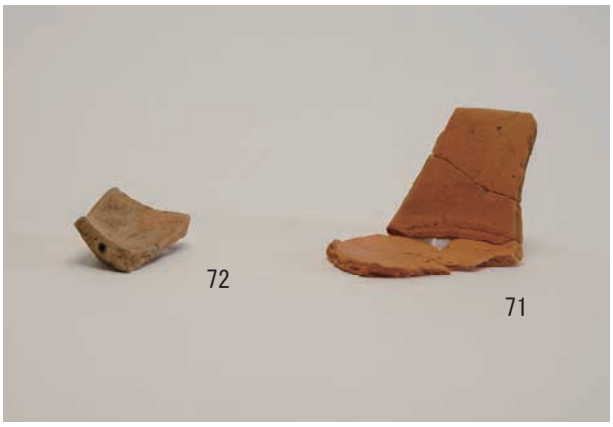
第 28 図　出土遺物写真２





第 29 図　出土遺物写真３





第 30 図　出土遺物写真４

第 31 図　出土遺物写真５

Ⅳ．総　　括

今回の発掘調査では、縄文時代と弥生時代、古代、中世の遺構と遺物を確認した。

縄文時代の遺構は、竪穴住居ＳＩ270や埋甕ＳＸ２・３が挙げられる。出土した土器は粗製土器が大半を占めるが、数少ない文様や注口土器の共伴から、ＳＩ270の年代は後期後半、三万田式土器から鳥井原式土器に収まるとみられる（注１）。周辺では、西隣のヘボノ木遺跡第47次調査で土坑ＳＫ2365（注２）、神道遺跡第19次調査で後期後半の太郎迫式土器から三万田式土器にかけての竪穴遺構（注３）が検出されたほか、神道遺跡第６次調査で埋甕（注４）、第18次調査で西平式土器の土坑（注５）、第25次調査で３基の埋甕（注６）、第26次調査では５基の竪穴住居や13基もの埋甕が見つかった（注７）。ＳＩ270は、これら後期後半の遺構群の西側に位置し、ＳＸ２・３と共に、井田川の西岸にも同時期の遺構が及ぶことを明らかにした。また、滑石を含む土器片（第26図60・61）は、前期の曽畑式土器、もしくは中期後半から後期初頭の阿高式系土器に収まるとみられる。第47次調査地点でも未報告だが曽畑式土器が出土しており、南西側に位置する山下遺跡（注８）でも曽畑式土器が出土しており、前期の集落の範囲を示す。口縁部に刻み目を有する土器片（第25図30、第26図57・87）は、後期後半の北久根山式土器に収まるとみられる。ヘボノ木遺跡では第62・66次調査で出土しており（注９）、西小路遺跡や水洗遺跡から広がる集落の範囲を示唆するとみられる。

弥生時代の明瞭な遺構はないが、ＳＫ300や複数のピットから弥生土器が複数出土した。いずれも破片だが、その年代は前期後半と中期後半に大別できる。周辺では、前期後半から中期初頭の土坑が神道遺跡第２次調査で検出されている（注10）。中期後半の遺構は、第34次調査の竪穴住居（注11）と第47次調査の土坑、神道遺跡第18次調査の土坑ＳＫ118・120が挙げられる。第74次調査はこれらの遺構の間に位置し、ヘボノ木遺跡南東部と神道遺跡の遺構が一連の集落である可能性を示す。

古代の遺構は、土坑ＳＫ161・250や火葬墓ＳＸ１、ピットが挙げられる。ＳＫ250からは９世紀後半から10世紀の土器が出土した（注12）ほか、ピットから８世紀後半まで遡る筑後型の土師器埦（第26図71）や10～11世紀の黒色土器Ｂ類の鉢（第26図80）など、８世紀から11世紀の土器が出土した。ＳＫ161・250の規模や出土遺物は、第53次調査（注13）のＳＫ2484・2486や神道遺跡第18次調査のＳＫ２・70に類似しており、伝馬道に面した集落の存在が指摘できる。火葬墓ＳＸ１は、ヘボノ木遺跡で８番目の検出例である。土師器甕を用いた同様の遺構は、これまで第３次調査（注14）と第７・８次調査（注15）、第24次調査（注16）、第36次調査（注17）で検出されており、ヘボノ木遺跡の中央部を中心に分布する傾向が指摘されてきた（注18）。今回、ヘボノ木遺跡の南東部で検出したことで、火葬墓が遺跡の中央部から南部一帯に広く分散する様相が示唆できる。なお、ＳＸ１の説明で述べたように、これらの遺構は第３次調査の検出例を除いて火葬骨や焼土といった火葬墓の特徴を示す遺物は共伴していない。従って、火葬墓以外の用途の可能性が残る。

最後に、調査区南東部で検出した土坑ＳＫ230・240・320からは、貿易陶磁器の白磁碗や糸切底の土師器皿が出土した。これらわずかな出土遺物から、遺構の年代は12世紀に収まるとみられる。同時期の遺構として、第22次調査（注19）のＳＫ1680が挙げられるが、ヘボノ木遺跡の12世紀の遺構がこのように単独で分布するのに対して、ＳＫ230・240・320は密集している点が注目できる。

【注】

（1）ＳＩ270出土の縄文土器の年代は、下記の文献を参考にした。
　　宮内克己「三万田式土器の研究」　九州古文化研究会『古文化談叢』第８集　昭和56年
　　富田紘一「三万田式土器」　加藤晋平・小林達雄・藤本強・編『縄文土器Ⅱ』縄文時代の研究４　雄山閣出版　平成６年
　　後藤晃一「九州縄文時代注口土器の研究」　九州古文化研究会『古文化談叢』第48集　平成14年
　　久山町教育委員会『片見鳥遺跡』久山町文化財調査報告書第11集　平成18年

（2）久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第11集』久留米市文化財調査報告書第71集 平成２年

（3）久留米市教育委員会『平成11年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第161集　平成12年

（4）久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第６集』久留米市文化財調査報告書第50集 昭和62年

（5）久留米市教育委員会『神道遺跡　―第18次調査―』久留米市文化財調査報告書第154集　平成11年

（6）久留米市教育委員会『二本木遺跡群Ⅶ』久留米市文化財調査報告書第291集　平成22年

（7）久留米市教育委員会『二本木遺跡群Ⅷ』久留米市文化財調査報告書第302集　平成23年

（8）久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報ＸⅨ』久留米市文化財調査報告書第412集　平成31年

（9）久留米市教育委員会『へボノ木遺跡　―第62次調査―』久留米市文化財調査報告書第121集　平成８年
　　久留米市教育委員会『久留米市埋蔵文化財調査集報Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第167集　平成12年

（10）注４文献と同じ。

（11）久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第８集』久留米市文化財調査報告書第58集 平成元年

（12）古代・中世の土器の分類と年代は、以下の文献に拠った。
　　松村一良「筑後国府跡の調査」　（財）古代學協會『古代文化』第35巻第７号　昭和58年
　　山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器　―10～12世紀の資料（１）本文編―」　日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　昭和63年

（13）久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第５集』久留米市文化財調査報告書第45集 昭和61年

（14）久留米市教育委員会『昭和53年度東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』久留米市文化財調査報告書第21集 昭和54年

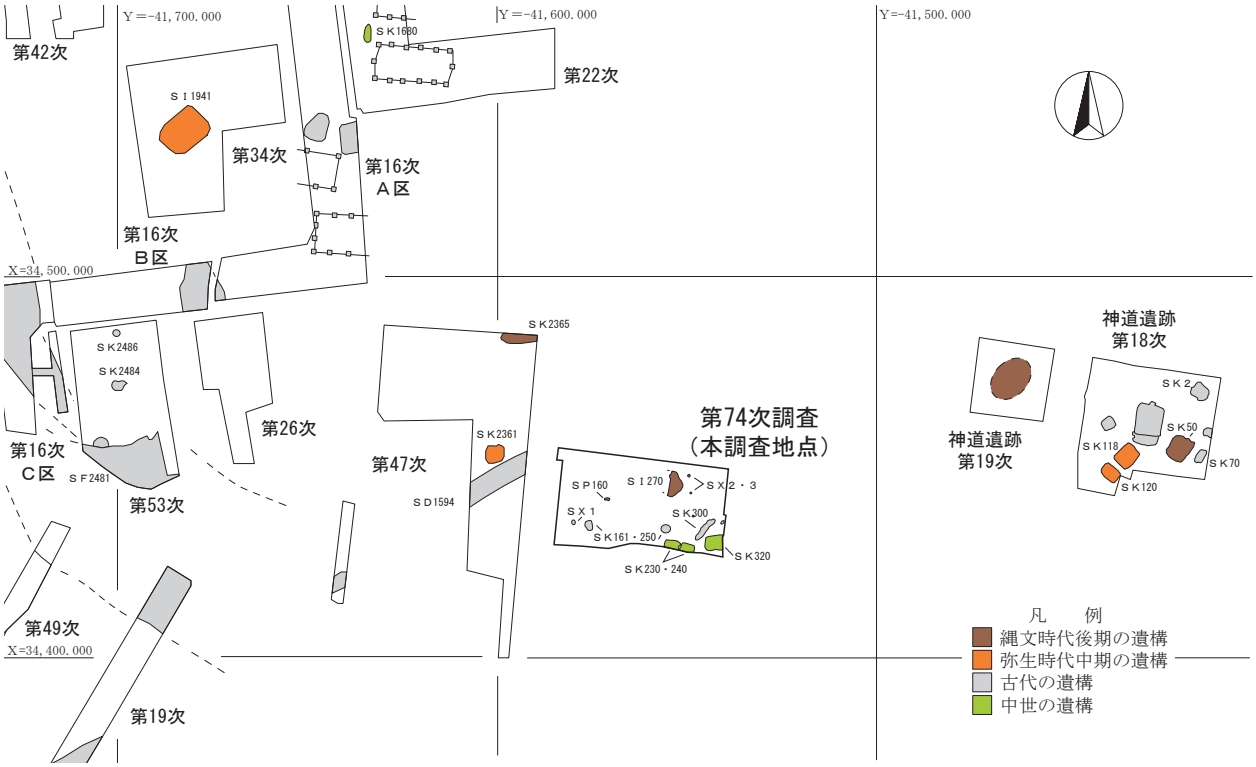
（15）久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第１集』久留米市文化財調査報告書第29集 昭和56年

（16）注13文献と同じ。

（17）久留米市教育委員会『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書第９集』久留米市文化財調査報告書第61集 平成２年

（18）久留米市史編さん委員会・編『資料編　考古』久留米市史第十四巻　久留米市　平成11年
　　神保公久「【資料紹介】久留米市山本町出土の蔵骨器」　福岡考古談話会『福岡考古』第18号　平成11年

（19）注４文献と同じ。



第 32 図　へボノ木遺跡南東部・神道遺跡主要遺構図（1/1,000）

報　告　書　抄　録

ふりがな	へぼのきいせき　－だい74じはっくつちょうさほうこく－
書名	へボノ木遺跡　－第74次発掘調査報告－
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第434集
編著者名	西　拓巳（編）
編集機関	久留米市　市民文化部　文化財保護課
所在地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町15番3　Tel 0942-30-9225　Fax 0942-30-9714 E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2022年（令和4年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
へボノ木遺跡（きいせき） 第74次（だいじちょうさ）調査	久留米市（くるめし） 東合川（ひがしあいかわ） 三丁目 257番1	40203	030145	33° 18′ 48″	130° 33′ 05″	20210419 ～ 20210529	258㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
へボノ木遺跡 第74次調査	集落	縄文 古代 中世	竪穴住居　1基 ピット　1基 埋甕　2基 土坑　3基 ピット　2基 火葬墓　1基 土坑　3基	縄文土器、弥生土器、土師器、黒色土器、須恵器、古瓦、陶磁器、石製品、鉄製品	縄文時代の竪穴住居を検出。

要　約

調査地点は、高良山からは派生した丘陵と段丘崖を経た低位段丘の上に位置し、ヘボノ木遺跡の南東隅にあたる。弥生時代中期後半の土器や古代の火葬墓、10世紀の土坑といった、これまでヘボノ木遺跡で見つかった遺構や遺物を発見した。一方で、縄文時代の竪穴住居や埋甕といった神道遺跡で検出された遺構も検出し、神道遺跡とヘボノ木遺跡の遺構が一連のものである可能性を示唆する。

土木工事の届出日	令和2年8月13日	遺物の発見通知日	令和3年6月4日 （3文財第557号）

ヘボノ木遺跡
－第74次発掘調査報告－
久留米市文化財調査報告書　第434集
令和4年3月31日
発　行　久留米市教育委員会
編　集　久留米市 市民文化部 文化財保護課
福岡県久留米市城南町15番3
印　刷　中村印刷有限会社
久留米市梅満町972